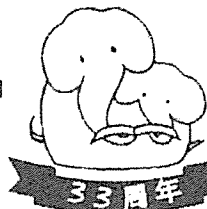


子どもの本

研究会



『私の一冊』
「あの戦争から遠く離れて 私につながる歴史をたどる旅」

著者 城戸久枝
出版社 情報センター出版局／文藝春秋社（文庫）

土井 郁夫



「私の一冊」として拙稿を掲載していただくことになり、お礼申し上げます。
実は、私は小説をあまり読みません。読むのは実用書が中心で、小説と言ってもノンフィクションや評伝がほとんどです。報道の現場にいて、刺激の強いものにさらされていると、俗にいう「事実」は小説よりも奇なり」と思えてきてしまうからだと思います。

さて、この本の著者の城戸久枝さんの父親の城戸幹さん（中国名Ⅱ孫玉福）は中国孤児です。小説では、3歳の頃孤児となり、中国人養母に大事に育てられるが、高校生になり日本人と知り、中国で苦難の生活を続ける。そして文化大革命の中、政府の訪日調査が始まる前、昭和45年に帰国する、その経緯を描いています。小説の後半は、今度は娘の城戸久枝さん自身が中国の吉林大学に留学し、父の足跡をたどり、養母の親族と交流していく様子を描いています。この小説は、NHKでドラマ化され、2009年に「遙かなる絆」という題で放送されたのでご存知の方もいらっしゃると思います。

去年は戦後70年ということで、戦争に関連した本が多く出版されています。『中国残留孤児70年の孤独』（平井美帆著）は、残留孤児や残留婦人として日本に帰国した人たちやその2世などに取材したノンフィクションで、前記の城戸幹さんの話も短く登場します。また、熊本に関係したものは、戦時中台湾で教師をした後、故郷の玉名市に帰国した高木波恵さんが手紙を出しという話をもとに現地取材をした『この手紙、とどけ！ 106歳の日本人教師が88歳の台湾人生徒と再会するまで』（西谷格著）が今年の2月出版されました。

紹介した城戸幹さんは、今73歳。これらの本を読んでいると、太平洋戦争は終わって70年になるけれど、戦争に人生をほんろうさせられた人たちは、今も自らの人生を生きている。現在進行形の話なのだというのを改めて認識させられました。

（NHK熊本放送局 前局長）
【参考】『中国残留孤児 70年の孤独』 集英社インターナショナル・『この手紙、とどけ！ 106歳の日本人教師が88歳の台湾人生徒と再会するまで』（小学館）※4月25日付けで局長が交代しました。